発　行：広報委員会
責任者：川口浩司

Avenue des Meuniers 133
1160 Brussels, Belgium
TEL: +32 (0)2-647 38 39
e-mail : jimukyoku@nihonjinkai.be
URL : www.nihonjinkai.be

Bimonthly Bulletin of the Japanese Association
No. 430 November 2026
ONLINE

日本人会会報



Credited by ARTONOV　Photo by © DYOD

「おとの三井寺」の一場面

目次

2 **欧州の中心ベルギーから、モビリティの未来を支える**
日比 佑輔

5 **2026 年度　大使杯・第 5 回日本人会ゴルフコンペ**
日本人会ゴルフ部

6 **Résonances au temple Mii-dera インタビュー**
日本人会事務局　中石 郁子

9 **西欧絵画の楽しみ方 116**
「牛乳を注ぐ女」フェルメール
森 耕治

17 **ベルギーのありふれた生活 25**
トーゴ外相の話
藤野 ユミリ

19 **告知板**

21 **今、学校では** 会員限定
ブラッセル日本人学校

24 **会員異動** 会員限定

25 **2026 年度ベルギー日本人会 第 1 回理事会議事録（2026 年 9 月 8 日 開催）** 会員限定

29 **編集後記**

11月号

欧州の中心ベルギーから、モビリティの未来を支える

AISIN Europe s.a.
日比 佑輔

皆さまは、アイシンという会社をご存じでしょうか。

アイシンは 1965 年に創業した自動車部品メーカーです。現在では世界各地で事業を展開し、約 11 万人の従業員を擁するグローバル企業へと成長しました。自動車部品メーカーとして世界有数の規模を誇り、多くの自動車メーカーを支えています。経営理念として「“ 移動 ” に感動を、未来に笑顔を」を掲げ、人々の豊かな暮らしに貢献するモビリティ社会の実現を目指しています。私たちの製品は、普段あまり目にすることはありません。しかし、世界中を走る多くの自動車の中で重要な役割を果たしています。車を動かすためのトランスミッションや電動車向けの駆動装置、ブレーキシステム、サンルーフ、自動開閉ドアなど、安全で快適な運転を支えるさまざまな製品を開発・製造・販売しています。皆さまが日常で利用される車の中にも、アイシンの技術が使われているかもしれません。

欧州は自動車産業にとって特別な地域でもあります。世界有数の自動車メーカーが本拠地を構え、電動化や環境技術の分野でも世界をリードしています。近年は電気自動車の普及や脱炭素化に向けた取り組みが加速しており、自動車産業は 100 年に一度の大変革期を迎えています。アイシン欧州事業もこうした変化の最前線に立ち、次世代モビリティ社会に向けた挑戦を続けています。欧州で得られた知見や技術は日本や世界各地域にも展開され、アイシングループ全体の成長を支える重要な役割を果たしています。

さて、そのアイシンがなぜベルギーに拠点を置いているのでしょうか。

ベルギーは人口約 1,200 万人の比較的小さな国ですが、欧州の政治・経済の中心地として重要な役割を担っています。ブリュッセルには欧州連合（EU）や NATO の主要国際機関が集まり、欧州各国の人々が日常的に行き交い、各国を結ぶ交通網も発達しています。またドイツ、フランス、オランダ、ルクセンブルクと隣接しており、欧州全域へのアクセスにも優れています。こうした立地条件から、1971 年、アイシンはベルギーに欧州事業の統括会社であるアイシンヨーロッパを設置し、欧州各国の営業・開発・生産活動を支えています。現在ではベルギーを中心に、ドイツ、フランス、スウェーデン、チェコ、トルコ、英国など、欧州各地の拠点と連携しながら事業を展開しています。欧州市場のお客様に近い場所で活動することで、多様なニーズに迅速に対応し、新しい技術や製品の開発につなげています。日本から約 9,000km 離れた場所にありながら、ベルギーはアイシンの欧州事業を支える重要なハブとして機能しているのです。また、ベルギーはビジネスだけでなく文化や歴史に触れる機会にも恵まれています。週末に近隣国を訪れることもでき、欧州の多様性を身近に感じられることも魅力の一つです。

また、ベルギーで働く魅力の一つは、その国際性にあります。アイシンヨーロッパにはさまざまな国籍の社員が在籍しており、異なる文化や価値観を持つ人々と日々協力しながら仕事をしています。一つの会議で複数の国々のメンバーが意見を交わすことは日常です。こうした環境は新たな視点や発想を生み出し、個人としても組織としても成長する機会となっています。

さらに、私たちはベルギーで活動する日本企業の一員として、日本と欧州を結ぶ架け橋の役割も担っています。欧州で生まれる新しい技術や市場動向を日本へ伝える一方で、日本のモノづくりや品質へのこだわりを欧州のお客様へ届けています。また、多くの日本企業や日本人が活躍するベルギーにおいて、企業同士の交流や情報共有は非常に重要です。その意味でも、ベルギー日本人会が果たす役割は大きく、私たちにとっても心強い存在です。

ベルギーで暮らし、働くことを通じて感じるのは、人と人とのつながりの大切さです。日本から遠く離れた欧州の地であっても、日本人同士が支え合い、交流できるコミュニティがあることは大きな安心につながります。私たちもその一員として、地域

社会とのつながりを大切にしながら活動を続けています。

これからもアイシンは、日本で培ったモノづくりの精神と欧州で得た経験を活かし、安全で快適、そして環境に優しいモビリティ社会の実現に挑戦していきます。そしてベルギーを拠点に、日本と欧州をつなぐ企業として、人々の暮らしや産業の発展に少しでも貢献できればと考えています。皆さまとともに、このベルギーの地で新たな未来を築いていけることを楽しみにしています。

ベルギーで事業を行う私たちは、地域社会とのつながりも大切にしています。欧州で活動する日本企業の一員として、日欧のビジネスや文化交流の架け橋となることを目指しています。また、ベルギー日本人会をはじめとするさまざまなコミュニティ活動を通じて、日本人同士のつながりを深めるとともに、日本とベルギー、さらには欧州との相互理解や友好関係の発展にも貢献していきたいと考えています。

AISIN Europe s.a.
日比 佑輔





COMICS ART MUSEUM BRUSSELS

kana

RÉGION DE BRUXELLES-CAPITALE
BRUSSELS HOOFDSTEDELIJK GEWEST
BRUSSELS CAPITAL REGION

FÉDÉRATION WALLONIE-BRUXELLES

京都国際マンガミュージアム
KYOTO INTERNATIONAL MANGA MUSEUM

京都精華大学国際マンガ研究センター
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
INTERNATIONAL MANGA RESEARCH CENTER

sonuma
LES ARCHIVES AUDIOVISUELLES

Japan-Belgium 1866-2026

在ベルギー日本国大使館
EMBASSY OF JAPAN
IN BELGIUM

2026 年度　大使杯・第 5 回日本人会ゴルフコンペ

日本人会ゴルフ部
中村





第 5 回

開催日　9 月 27 日（日）
コース　Golf Château de La Tournette
参加人数　26 人（女性 2 人、男 24 人　内初参加 6 人）
幹事会社　Toyota Tsusho Europe SA

順位	氏名（敬称略）	会社名	OUT	IN	Total	H/C	Net
優勝	中村　崇志	Toyota Tsusho Europe SA	42	47	89	20	**69**
準優勝	津野　泰明	NYK BULKSHIP ATLANTIC	45	45	90	21	**69**
3 位	押野　増男	LIGHTEC EUROPE S.A	45	44	89	18	**71**
ﾍﾞｽﾄｸﾞﾛｽ	久保田　淳雄	ASAHI KASEI BIOPROCESS EUROPE S.A./ N.V.	40	40	80	7	**73**

グローバルネットワークでお客様の
引越 / 輸送ビジネス をサポート

・日本人立会い　・ハウスクリーニング
・不用品回収　・お譲り品のお届け

NIPPON EXPRESS We Find the Way
N X ベルギー株式会社(旧：ベルギー日本通運)
NIPPON EXPRESS (BELGIUM) N.V./S.A.
TEL : +32 (0)2-751-7814/15
NEBE-removal@nipponexpress.com
https://www.nipponexpress.com/moving/be/

Résonances au temple Mii-dera インタビュー

日本人会事務局
中石 郁子

10 月 7 日（水）、小雨のちらつく秋の夕方、ブリュッセルで毎年開催される複合芸術フェスティバル「ARTONOV」にて、「Résonances au temple Mii-Dera（おとの三井寺）」の公演が行われました。

日本とベルギーの外交・文化交流 160 周年を迎えた今年、第 12 回 ARTONOV が掲げるテーマは、民藝運動を代表する陶芸家・河井寛次郎の言葉「We do not work alone.」。

今回上演された「おとの三井寺」は、ブリュッセルを拠点に活動するクラリネット奏者・吉田誠さんが芸術監督を務め、2022 年から 5 年間にわたり取り組んできたプロジェクトの集大成であり、初の海外公演となりました。

舞台には、総本山三井寺第 164 代長吏・福家俊彦氏をはじめ、三井寺の僧侶の皆様、尺八奏者の藤原道山氏、重要無形文化財保持者でシテ方宝生流の能楽師・辰巳満次郎氏、辰巳和磨氏らが参加。和歌、声明、能楽、尺八、クラリネットという異なる表現が、ひとつの舞台で響き合いました。

公演後、5 年間にわたるプロジェクトに込めた思いや、初めて海外で披露した今回の公演について、出演者の皆様にお話を伺いました。





―「おとの三井寺」は、どのような思いから始まったプロジェクトなのでしょうか。

吉田誠氏：

日本のさまざまな文化を融合させるんですが、それぞれの本当の本質を残したまま、本当の融合をしたいということです。それから、日本の和歌を再構築して音にする。そういう思いがあって始まりました。

― 今回は、西行と藤原定家の二首の和歌が取り上げられました。この二首を選ばれた理由は何でしょうか。

福家俊彦氏：

今回はやっぱり、海外でもやりたいという思いがありました。それで、日本を本当に代表するような和歌を選ばせていただきました。

辰巳満次郎氏：

あと、「入相の鐘」の和歌の方は、鐘の音がこれからも平和であって、永遠に聞こえますようにという思いも込めて。「明日も聞ければ」という思いもどこかにあって、やらせていただきました。

― 二つの和歌を海外で表現するにあたり、意識されたことはありますか。

辰巳氏：

日本の文化には、昔から人と人が平和に融合するという考え方があったと思うんです。

能の演目の中にも和歌がいっぱいありますけれど、表面的なストーリーだけではなくて、その奥には、男女だけではなく、人と人が中で平和に融合するという考え方がある。それが日本人の中で少し希薄になってきているのではないかと思います。私の場合は、芸能の中にそういうものがまだ日本で残っているので、そういう心で向き合わないといけない。祈りの芸能ですから。仏教音楽も祈りの音楽ですから、すごく親和性がある。聖徳太子が奏じたと伝えられる尺八ももちろんそうです。クラリネットの吉田さんはヨーロッパで活動しているけれども、精神的には日本の精神性を持っている。また、使用しているクラリネットも日本の精神性を表現できるように特注して作っているんですね。

今日は、そういった精神性を持ったメンバーが集まっていて、本当に珍しい組み合わせだと思います。人数は少ないですけれど、こういうメンバーと一緒にできることを、とてもありがたく感じています。お客様もすごく集中して観てくださっていました。日本で公演をすると、途中で眠ってしまう方もいらっしゃるんですけれど（笑）、今日は見渡してみても、皆さん最後までしっかり観てくださっていて、それにも感激しましたね。

― 日本の方と海外の方では、反応に違いを感じますか。

吉田氏：

そうでもないです。やっぱり、いいものはいいというか、そういう精神はどの国に行っても変わらない。素晴らしいもの、何か訴えるものについて、違うと思ったことはないです。

― お話の中で「平和」や「融合」という言葉が出てきました。三井寺が戦乱を越え、長い歴史の中で復興を繰り返してきたことも関係しているのでしょうか。





福家氏：

三井寺も何度も焼かれてきていますけれど、仏教や寺院が持っている精神も、今の時代では簡単に失われてしまったり、なかなか受け止めてもらえなくなっていると感じています。

今、世界を見ても宗教がだんだん分かれつつあって、悪い方向に変わっている部分もあると思うんです。我々自身も、少し見直さないといけないと思っています。

それをどういった形で伝えていくか。言葉で伝える方法もありますけれど、やっぱり体感として分かっていただいて、つながっていければ一番いい。こういう芸能や音楽というのは、言語を超えるものがありますから、海外の方にも日本の精神性や文化が少しでも伝わればと思っています。

―5 年間続けてこられて、ご自身の中で変わったこと、生み出されたと感じることはありますか。

吉田氏：

芸術監督として 5 年間やらせていただいて、そうですね、始めた頃よりも、もっと日本のスピリットみたいなものが体に取り込まれている気がします。全然、見える解像度が違う。

いろいろな素晴らしい芸術家だったり、宗教家の方が、みんな教えてくださるんですね。

だから、ますますもっと違う形で、自分が日本人で西洋楽器を手にしながら、日本の精神というものを伝えたいという思いがあります。

日本のスピリットみたいなものと西洋楽器を、どうやってつなげていったらいいのか。体でどんどんそれを感じるようになって、体現できるようにもなってきている。もっとなりたいなと思いますね。



― 私自身、尺八の音色は昔から耳にする機会がありましたが、今回、クラリネットと尺八がここまで調和することに驚きました。

吉田氏：

そこは、やっぱり知っていただきたいです。

楽器は違う。でも、「おとの三井寺」と言っているぐらいなので、音なんですよ。

どんな楽器であろうが、音が二つ鳴ったら、それを体で合わせていけば、耳で合わせていけば、やっぱり調和する。その可能性ですよね。

その人間の力とか、そういうものを、自分自身もっと高めたいし、知ってもらいたいと思います。楽器に関係なく。

インタビューが終わろうとしたとき、辰巳満次郎さんから、逆に一つの質問を投げかけられました。

辰巳氏：

それより、三井寺の鐘、聞こえましたか？

― はい。最初の音ではなくて、西行の歌を読まれたときに、鐘が聞こえた気がしました。

辰巳氏：

ええ。それはつまり、我々は「引き算」の世界にいるんです。

それをオーディエンスが自分で解釈して完結させるのが、日本の古い文化なんです。

目まぐるしく変化する世界情勢の中、欧州の中心地・ブリュッセルの夜に響いたのは、それぞれ異なる背景や性質を持つ表現が呼応する「融和」の音でした。

残された余白をそれぞれが受け取り、自らの解釈で完成させていく。「おとの三井寺」が 5 年間をかけて紡いできた世界は、ブリュッセルの夜にも静かに、確かに響いていました。

Festival ARTONOV

Festival ARTONOV は、毎年 10 月にブリュッセルで開かれる芸術祭です。会場はアール・ヌーヴォーやアール・デコの邸宅などの歴史的建築で、音楽、ダンス、美術などを組み合わせ、その空間のために作られた舞台を間近で楽しめます。若手アーティストの発表の場としての役割も大切にしており、世代や国籍、ジャンルを越えた新しい作品に出会えます。子ども向けのプログラムが組まれる年もあります。

https://www.festival-artonov.eu/

Credited by ARTONOV
Photo by © DYOD

西欧絵画の楽しみ方　116

「牛乳を注ぐ女」フェルメール

美術史家
森 耕治



「牛乳を注ぐ女」、フェルメール、1658 年頃

フェルメールの代表作として広く知られる「牛乳を注ぐ女」は、しばしば「北のモナ・リザ」とも呼ばれ、ヨーロッパでは乳製品の広告にも用いられて、親しみやすいイメージとして流通しています。しかしその一方で、この作品の本質については、十分に解明されているとは言い難いのが現状です。

日本においてこの絵は、一般に 17 世紀オランダに流行した「風俗画」、あるいは台所における日常生活を極めてリアルに描いた作品として理解されてきました。そこでは、若い料理女が慎ましく家事に従事する姿が、写実的かつ色彩豊かに描かれているとされ、ときに控えめな官能性を含む表現として説明されることもあります。

確かに画面には、簡素な室内において、パンと牛乳という質素な食事を準備する女性の姿が、驚くほどの写実性をもって描き出されています。また、このような料理女を主題とする作品は、16 世紀以降のネーデルラント絵画において決して珍しいものではありません。

この絵もそうした伝統の延長線上に位置づけることは可能でしょう。しかしながら、このような理解にとどまる限り、この絵に込められたより深い意味は見落とされてしまいます。

フェルメールは、一見すると日常的な情景を描きながら、その内部に複数の寓意的要素を組み込み、それらを統合することによって、別の次元の意味を構築していると考えられるのです。すなわちこの絵は、単なる風俗画ではなく、フェルメールのカトリック信仰を背景とした象徴的構造を内包する作品として読み解く必要があります。

この点については、すでにワシントン・ナショナル・ギャラリーの学芸員であり、フェルメール研究の第一人者である Arthur K. Wheelock Jr. が、1995 年の時点で、この絵が風俗画や肖像画の枠を超えた寓意的性格を有する可能性を指摘しています（1）。

さらに彼は、オランダ社会における道徳観や行動規範を理解するためには、同時代の人々が現実世界の中に寓意や神学的意味を見出そうとする姿勢を考慮する必要があると述べています（2）。にもかかわらず、この絵に関しては依然として従来の風俗画的理解が支配的であり、その象徴的側面は十分に検討されてきたとは言えません。

したがって本稿では、この作品を改めて精査し、画面に配置された諸要素、とりわけパンと牛乳という主題的モチーフに着目することによって、そこに潜在する宗教的意味を明らかにしたいと思います。

画面概説

絵の舞台となっているのは、土間と白壁から成る簡素な室内です。一見して台所と理解されますが、通常この種の空間に備わっているはずの大きな暖炉は描かれておらず、また床にもタイルは敷かれていません。

左上の窓には割れたガラスが見られ、空間全体に装飾性はほとんど認められません。ここではまず、徹底して質素であることが強調されています。

さらに重要なのは、この白い壁が最初から空白であったわけではないという点です。X 線調査によっ

て、制作の初期段階では、この壁にオランダの大きな地図が掛けられていたことが確認されています。しかしフェルメールは、完成に至る過程でその地図を塗り消し、現在見られる静かな白い壁へと変更しました。

この選択は決して偶然ではありません。17 世紀オランダ絵画において地図は、しばしば世俗的世界、商業活動、あるいは国家意識を象徴する要素として用いられました。もしここに大きな地図が残されていれば、この室内はより現実的で世俗的な性格を帯びていたでしょう。

しかしフェルメールは、それをあえて消し去りました。その結果として残された白い壁は、単なる装飾の欠如ではなく、むしろ沈黙と内面的集中を支える空間として機能しています。

すなわち彼は、外の世界を示す地図を退けることで、この室内をより静かで、祈りにふさわしい場へと変えたのです。

このようにして生まれた簡素な空間の中で、唯一際立っているのが、窓から差し込む光です。この光は、室内全体を均等に照らすのではなく、女性の上半身とその手元、そしてテーブル上のパンを選択的に照らしています。





足温器

とりわけ注目すべきは、水差しから器へと注がれる牛乳の細い流れが、この光によって明確に可視化されている点です。

フェルメールはここで、単なる写実を超えて、「何を見せるべきか」を厳密に選び取っていると考えられます

女性は白い頭巾をかぶり、黄色の上衣に赤いスカート、そしてラピスラズリを用いた深い青のエプロンを身につけています。この赤と青の対比は、画面に強い秩序を与えると同時に、後に触れる象徴的意味を予感させるものです。

彼女はややうつむき加減に、半ば目を閉じるようにして、静かに牛乳を器へと注いでいます。

本来このような作業においては、こぼさないよう注意深く視線を向けるのが自然ですが、ここではむしろ内面に向かうような集中が感じられます。この点において、彼女の行為は単なる家事労働の描写にとどまらず、いわば祈るような行為として表現されていると言えます。

画面右下には、小型の足温器が置かれています。木製の箱状の器具で、上部には複数の穴が開けられ、内部には炭火を入れる構造になっています。その前に転がる棒は、炭をかき混ぜるための道具と考えられます。

技術的調査によれば、この部分には当初、より大

人材探しなら
インフィニティ
INFINITY RECRUITMENT
転職をご検討の方 / 人材をお探しの企業様
info@infi-r.com
www.INFI-R.com
02 356 9886
Chaussée de Vleurgat 119, 1000 Brussels

きな暖房用の籠が描かれていたことが判明していますが、フェルメールはそれを塗りつぶし、あえてこの小さな足温器へと変更しました。

この選択は重要です。大きな暖炉も暖房籠も描かれず、小さな足温器のみが残されているという状況は、厳冬ではなく、暖房が限定的に必要とされる季節、すなわち早春あるいは晩秋を示唆していると考えられます。

ここにおいて、画面は単なる空間描写にとどまらず、ある特定の時間性をも帯び始めているのです。

さらに、足温器の背後の壁にはデルフト焼のタイルが見えます。そのうち左側にはキューピッドが描かれており、この図像を根拠として、この絵を秘かな性愛の暗示を含む風俗画と解釈する説も古くから存在します。

しかし、この点については慎重であるべきでしょう。17 世紀オランダ絵画においてキューピッドは確かに恋愛を示す図像として用いられますが、それが直ちに世俗的な性愛のみを意味するとは限りません。

フェルメールはしばしば、このような世俗的な図像を、そのまま世俗的意味にとどめるのではなく、より深い宗教的文脈の中に再配置しています。日常的な室内や家庭の情景の中に、信仰や内面的省察の構造を忍び込ませることこそ、彼の絵画の大きな特徴の一つです。

とりわけこの絵のように、画面全体が節制と静けさによって構成されている場合、この愛はむしろ神への愛、あるいは信仰的な献身として読み替えられる可能性も残されています。

したがって、この小さなタイルを単純に官能性の証拠と見なすよりも、画面全体の宗教的構造の中で再検討する必要があります。

さらにテーブル上には、籠に入った黒パンと、すでに手でちぎられたパンの断片が見られます。女性が今まさに注いでいる牛乳は、これらのパンと結びつき、一つの料理として完成される直前の状態にあります。

このテーブル上のパンと、器へと注がれる牛乳という二つの要素は一見すると、非常に質素な食事の準備にすぎないように見えます。しかし、その簡素さこそが、むしろ特別な意味を帯びている可能性があります。

ここで注目すべきは、この料理に卵や砂糖といった付加的な食材が一切見られない点です。現在のオランダとフランドル地方の家庭料理いわゆるウェンテルテーフユ（WENTELTEEFJES）や「失われたパン」（VERLOREN　BROOD）と呼ばれるものは、牛乳に卵を加え、さらに甘味を施した軽食として発展しましたが、この絵に描かれているのは、それ以前の、より簡素で節制的な形態にとどまっています。

このような食事のあり方は、単なる貧しさの表現として理解することも可能です。しかし、先に見たように、この画面においては、空間も光も行為もすべてが厳密に選び取られている以上、パンと牛乳だけから成るこの構成もまた、意図的な選択と考えるべきでしょう。

さらに先ほど確認したように、季節は早春である可能性が高く、この点を踏まえるならば、この質素な食事は、単なる日常的な料理ではなく、特定の宗教的実践と結びついている可能性が浮かび上がってきます。

すなわち、このパンと牛乳は、単なる食材ではなく、より深い意味、とりわけ聖書的・神学的意味を帯びた象徴として理解されるべきものなのです。

以上のように、この作品における空間、光、行為、そして物質は、すべてが選択的に配置されており、偶然に見える要素はほとんど存在しません。

むしろそれらは、相互に関係しながら、一つの意味構造へと収斂していくように組み立てられていると考えるべきでしょう。

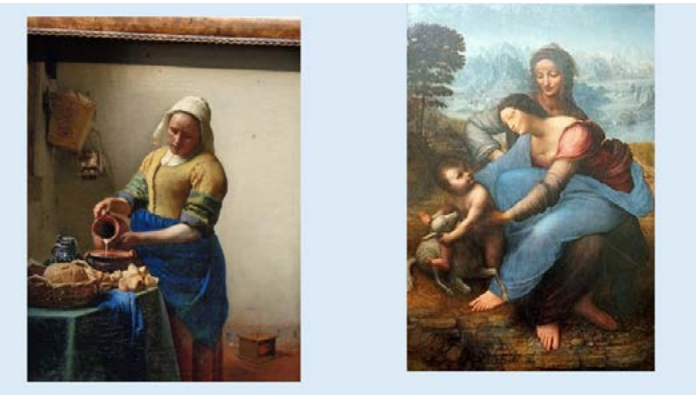
～料理女像の再解釈～聖母像への展開～

以上の観察を踏まえるならば、次に問題となるのは、これらの要素が最終的にどのような意味へと結びつくのかという点です。まず画面の中心に据えられた料理女の存在は、この構造全体を理解するための鍵を握っていると考えられます。

すなわち、彼女の姿は単なる日常的労働の描写にとどまるのか、それとも画面に配置された光や物質と連動しながら、より深い象徴的意味を担っているのかが問われなければなりません。

以下では、この女性像に注目し、その衣装、行為、そして周囲のモチーフとの関係を順に検討することによって、彼女が聖母的イメージを内包する存在として構成されている可能性を論証していきます。

1. 女の赤と青の色彩の取り合わせ



ダヴィンチ反転像との比較

この点に関連して興味深いのは、この絵がしばしば「北のモナ・リザ」と呼ばれてきたことです。この通称は一般には、静かな微笑みや謎めいた表情に由来すると説明されますが、そこにはさらに深い図像的連想が潜んでいる可能性
があります。

モナ・リザの作者であるレオナルド・ダ・ヴィンチは、ルーヴル美術館所蔵の「聖アンナと聖母子」において、聖母マリアを赤い衣と大きく身体を包み込む青いマントによって描いています。聖母は聖アンナの膝の上に軽やかに腰掛け、身をかがめながら幼いキリストに両手を差し伸べています。その姿には、母性的な慈しみと静かな内面性が強く表れています。

この作品を左右反転して見ると、その構図は「牛乳を注ぐ女」と驚くほど近い印象を与えます。画面の中心に赤と青の衣をまとった女性が大きく配され、やや身をかがめながら前方へ手を差し出す姿勢、そしてその視線が下方の存在へと静かに注がれている点において、両者は強い視覚的共鳴を示しています。もちろん主題そのものは異なりますが、構図のリズムと人物の精神的な気配には看過しがたい共通性があります。

これを踏まえて「牛乳を注ぐ女」を見ると、料理女もまた赤いスカートに、極めて高価なラピスラズリを用いた青いエプロンをまとっています。

しかも、ただの召使の衣服、とりわけ実用的なエプロンにまで、金よりも高いと言われた高価な顔料が惜しみなく用いられていることは、単なる写実的再現としては不自然です。そこには、視覚的な美しさ以上の意図があったと考えるべきでしょう。

すなわちフェルメールは、日常の料理女の姿の中に、聖母のイメージをひそかに重ね合わせていた可能性があります。牛乳を注ぐという行為もまた、この文脈において見るならば、単なる家事ではなく、「混じりけのない霊の乳」を与える聖母的な行為として理解される余地を持つのです。

このように考えると、料理女と思われていた女性は、実は静かに聖母のイメージを宿した存在として見ることができます。だからこそフェルメールは、エプロンにまでラピスラズリを用い、その姿を単なる風俗画の人物以上のものとして描いたのではないでしょうか。



ミルクとパン

2. 牛乳、霊の糧としての意味

次に、女性が注いでいる牛乳に注目します。牛乳は日常的な食材であると同時に、聖書の中では生命を養い、さらには生命そのものを形づくるものとして象徴的な意味を与えられています。

新約聖書「ペトロの手紙一」には、次のように記されています。

「生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。」（註 6）

ここでいう「霊の乳」とは、信仰を養い育てるための純粋な霊的糧を意味します。この記述を踏まえるならば、画面において静かに注がれる牛乳は、単なる身体の栄養としての液体にとどまらず、人間の内面を養う霊的な恵みを想起させるものとして読むことができます。

さらに、1637 年に初版が刊行されたオランダ語「国家訳聖書」（Statenvertaling）の「ヨブ記」10 章 10 節には、次の表現があります。

Hebt Gij mij niet als melk gegoten, en mij als een kaas doen runnen?（あなたは私を乳のように注ぎ、チーズのように凝固させたのではありませんか。）

ここでは、「乳を注ぐ」という行為そのものが、人間の身体が神によって形成される過程の比喩として用いられています。したがって聖書における牛乳は、人間を養う霊的な糧であるだけでなく、神によって与えられ、形づくられる生命とも結びついたイメージを持っていたことになります。

そして重要なのは、フェルメールがこの牛乳の流れを光によって際立たせている点です。細く連続する白い流れは明確に可視化され、画面の中でもとりわけ強い視覚的存在感を与えられています。それは単なる家事の一場面として処理されたものではありません。光を受けながら器へと絶えず注がれていく牛乳の姿は、生命を養い、あるいは生命そのものを形づくる神の恩寵が、人間のもとへと注がれているかのような印象を生み出しています。

このように「牛乳を注ぐ女」においては、物質としての牛乳と、それを可視化する光とが結びつくことによって、日常のもっとも平凡な行為が、生命と信仰にかかわる霊的な意味を帯びた出来事へと転化しているのです。

3. パン、キリストの身体

牛乳と対をなすもう一つの要素が、テーブル上のパンです。すでに見たように、このパンはちぎられた状態で置かれており、これから牛乳と結びついて一つの食事となる直前の段階にあります。

パンは新約聖書において、極めて明確な象徴性を担う要素として位置づけられています。

「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である」（註 7）。この言葉は、福音書の記述であると同時に、現在に至るまでカトリック教会のミサにおいて繰り返し唱えられる典礼の言葉でもあり、司祭が信者に聖体（パン）を授ける際に発せられる文言に対応しています。

また、「わたしは命のパンである。」（註 8）という言葉に示されるように、パンはキリスト自身、すなわちその身体を指し示すものとして理解されてきました。

この点を踏まえるならば、この絵においてパンが牛乳と結びつく直前の状態で描かれていることは、単なる食事の準備を示すものにとどまらないと考えられます。すなわちここでは、霊的糧としての「乳」と、キリストの身体を象徴する「パン」とが、これから一つの行為の中で結びつけられようとしている過程が提示されているのです。

4. 牛乳を注ぐという行為の意味

ここで改めて注目すべきは、女性の行為そのものです。彼女は単に牛乳を扱っているのではなく、それを器へと「注ぐ」という動作を行っています。この行為は、手元にとどめるのではなく、他へと移し分ける働きを本質としています。

しかもその動作は、急激なものではなく、細く連続した流れとして持続的に表現されています。牛乳は途切れることなく器へと注がれ、その流れが光によって明確に可視化されています。この点において描かれているのは、単なる調理の一瞬ではなく、糧が静かに分け与えられる場面そのものであると考えられます。

すでに述べたように、この絵において牛乳は霊的な糧を想起させ、パンはキリストの身体を象徴する要素として理解されうるものです。そしてパンに関して引用された「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である」（註 7）という言葉は、福音書の記述であると同時に、ミサにおいて聖体が授けられる際に繰り返し唱えられる言葉でもあります。

この点を踏まえるならば、ここで描かれている「注ぐ」という行為は、単なる物理的操作にとどまらず、宗教的な意味を帯びた行為として理解することができます。しかもそれは一度きりの動作ではなく、静かに持続する働きとして表現されています。

さらにここで注目すべきは、この糧が極めて限定

された形で示されているという点です。卵や砂糖といった付加的な食材は見られず、パンと牛乳のみから成るこの構成は、豊かさを示すものではなく、むしろ節度と抑制のもとに置かれた食事として理解されます。

このことは、この場面が単なる日常の一場面にとどまらず、特定の季節、あるいは宗教的な理由のもとに選び取られた状況である可能性を示唆していると言えます。

5. 四旬節とは

ここで重要となるのが、カトリックにおける四旬節(9)という習慣です。四旬節とは、復活祭に先立って設けられた準備の期間であり、暦の上ではおおむね早春にあたります。

この時期、信者は食生活を慎み、肉や卵、さらには贅沢な食べ物を控えることが求められてきました。少なくとも 20 世紀半ばまで、ベルギーのカトリック社会では四旬節中は、パン屋からチョコレートパンが消えました。

したがって四旬節とは、日常の中で節度を保ちながら過ごすことが求められる宗教的実践の季節です。

しかし重要なのは、17 世紀のオランダにおいて支配的であったカルヴァン派（改革派）は、原則としてこの四旬節を宗教的義務として重視しなかったという点です。

カルヴァン自身は仏語版「キリスト教綱要」第四巻第 12 章 20 節において、四旬節について「そこにはある種の迷信が含まれていました。というのも、一般の民衆は、四旬節の断食を行うことによって神に対して立派な奉仕をしていると考えていた」と明確に批判しています。さらに彼は同じ章で、「これほど重い誤りが、古代の教父たちの考えに入り込んだというのは驚くべきことです。」とさえ述べています（10）。

つまりカルヴァン派にとって四旬節とは、聖書的必然性を持つものではなく、むしろカトリック的悪習として距離を置かれるべきものでした。

したがって、この作品に四旬節的な食事の意味を読み取ることは、単なる時代風俗の説明ではありません。むしろそれは、フェルメール自身がカルヴァン派社会の中にあって、なおカトリックの信仰を内面に保持していたことを示す重要な手がかりとなります。

このような背景を踏まえるならば、この絵に描かれたパンと牛乳のみから成る食事は、単なる貧しさの表現ではなく、むしろ四旬節にふさわしい節制の食事として理解することが可能となります。

また、早春という季節的条件を考え合わせるならば、画面右下に見られる足温器の存在も、単なる日常的な道具ではなく、この時期特有の気候を反映したものとして位置づけることができるでしょう。

6.「失われたパン」とは

ここで注目すべきは、「失われたパン」と呼ばれる料理の名前です。ただし、この呼称については注意が必要です。現代の標準的なオランダ語では、この種の料理は一般にウェンテルテーフユ（wentelteefjes）（11）と呼ばれています。

「失われたパン」ヴェルロールン・ブロート（verloren brood）という言い方は、古いオランダ語の語法を現在まで保持しているベルギー北部で用いられている呼称です（12）。固くなった古いパンを牛乳に浸して食するこの簡素な料理は、無駄を避ける実用的な工夫であると同時に、かつては四旬節の節制にも適合するものでした（現在では卵に砂糖を混ぜてバターで焼く家庭料理として親しまれています）。

さらに重要なのは、この verloren（失われた）という語が、単なる日常語にとどまらず、オランダ語聖書の中で明確な宗教的文脈を持っていた点です。1637 年の「国家訳聖書」(Statenvertaling)（13）の「ルカによる福音書」第 15 章では、「失われた羊（Het verloren schaap）」「失われた銀貨（De verloren penning）」「失われた息子（De verloren zoon）」という三つの譬えが連続して語られています。

とりわけ、今日日本語で一般に「放蕩息子」と呼ばれる譬えが、オランダ語では De verloren zoon、すなわち「失われた息子」と呼ばれていることは注目されます。英語の The Prodigal Son やフランス語の Le Fils prodigue が息子の「放蕩」を前面に出すのに対し、オランダ語の呼称は「失われた」という状態そのものを強調しています。

したがって verloren という語は、単に古くなったものを指すのではなく、失われたものが再び見出されること、あるいは死んだと思われていた存在が再び現れることを含意する語として理解されます。

この点を踏まえるならば、「失われたパン」という呼称もまた、単なる料理名を超えて宗教的な意味を帯びている可能性があります。すなわちここに示されている質素な糧は、四旬節という節制の季節の中に置かれると同時に、その先にある復活祭、すなわちキリストの復活を予兆する意味をも内包しているのです。

7. 空のパン籠と使われない外出用ランプ

それでは、画面の細部に改めて目を向けてみましょう。左側の壁には、柳の枝を編んだパン籠が掛けられていますが、その蓋は閉じられたままであり、中に新しいパンが補充されている様子は見られません。このことは、通常であれば行われるはずのパンの買い足しが、この場面ではあえて行われていない可能性を示唆しています。

さらにその近くには、金属製のランプが壁に掛けられています。「マルクト・エンメル」と呼ばれたこの種のランプは、召使がまだ暗いうちに市場へ出かけ、食材を買い求める際に用いられるものでした。しかしこの場面においては、そのランプも使用された形跡を示さず、静かに壁に掛けられたままとなっています。



パン籠とランプ

これらの要素を総合するならば、この室内では、日常的に繰り返されるはずの家事の循環、すなわち食材を買い、準備するという一連の行為が、意図的に停止されていると考えられます。

したがってここに表されている情景は、単なる生活の一場面ではなく、あえて新たな食材を求めず、限られたものによって食事を整えるという宗教的節制の状態であると言えます。

このような状況は、先に説明した四旬節の実践とよく符合しています。すなわちこの画面においては、食事の内容だけでなく、それに至る過程そのものが抑制されることによって、節制という宗教的態度が空間全体に行き渡っているのです。

まとめ

以上見てきたように、「牛乳を注ぐ女」は、単なる台所の風俗画として理解するだけでは、その本質を十分に捉えることはできません。パンと牛乳、女性の衣服、足温器、空のパン籠、市場用ランプ、そして「失われたパン」という呼称は、それぞれが孤立した要素ではなく、相互に結びつきながら宗教的な意味を形づくっています。

料理女の姿には聖母の面影が重ねられ、彼女の手から注がれる牛乳には、信仰を養う霊的な糧と、神によって与えられ形づくられる生命という意味が重なります。そしてパンは、聖体としてのキリストの身体を想起させます。

さらに、この質素な食卓を四旬節という時間の中に置くことで、画面全体の意味はより明確になります。「失われたパン」は、単なる庶民の食事ではなく、節制の中で復活祭を待つカトリック信仰と結びついているのです。

したがって「牛乳を注ぐ女」は、日常の労働を描いた風俗画であると同時に、その日常の中に聖母、聖体、霊的な糧、生命、そして四旬節の祈りを織り込んだ作品です。

フェルメールは、誰もが見慣れた台所の光景の中に、自らの信仰を声高に語ることなく、静かな光と日常の所作によって描き残したのです。

無断転載を禁じます

森耕治様 プラティナメダル受賞のお知らせ

このたび、長年にわたり本会報に貴重な論考をご寄稿いただいている
森耕治様が、フランス芸術・科学・文学協会（Arts Sciernce Lettres）より
最高位のプラティナメダルを受賞されることとなりました。
このたびのご受賞を心よりお祝い申し上げますとともに、
今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

註

1. Wheelock 1995.p63
2. フェルメールとその時代展図録　ウィーロック氏による寄稿論文「フェ
メールとその時代における私的・公的生活」
3. ラファエロ・サンティ「大公の聖母」 フィレンツェ、ピッティ宮殿パラティーナ美術館所蔵
4. ラファエロ・サンティ「システィーナの聖母」
ドレスデン、アルテ・マイスター絵画館所蔵
5. レオナルド・ダ・ヴィンチ「聖アンナと聖母子」
パリ、ルーヴル美術館所蔵
6. 新約聖書「ペトロの手紙一」第 2 章第 2 節（新共同訳）
7. 新約聖書「ルカによる福音書」第 22 章第 19 節（新共同訳）
8. 新約聖書「ヨハネによる福音書」第 6 章第 48 節（新共同訳）
9. 四旬節は一般に「四十日」とされますが、その数え方には典礼暦上の約束があります。すなわち、復活祭前の四十日間を指しますが、主の日である日曜日は本来祝祭の日であるため、この四十日に算入しません。そのため実際には「灰の水曜日」から復活祭直前までの期間全体を指しつつ、そのうちの日曜日を除いて四十日と数えます。したがって暦の上では約六週間半にわたる、早春の宗教的準備期間となります。
10.「Institution de la religion chrétienne 」Jean Calvin,1560 年版を基に 1888 年にパリで再発行。E.BEROUD & Cie,Editeur, 第 4 巻 12 章 20 節、page574
11. ベルギーでの発音に即して、ここではウェンテルテーフユと表記します。
12. ベルギーのスーパーマーケットのレシピ
https://www.delhaize.be/nl/recepten/receptDetails/Klassiek-recept-voor-verloren-brood/r/3a6d2a37dcac42dabea49baed0b64459
13. Statenvertaling, Lukas 15. オランダ共和国の全国教会会議（Synode van Dordrecht, 1618–1619）の決定に基づいて翻訳され、1637 年に初版が刊行されたオランダ語聖書。ルカによる福音書第 15 章には、「失われた羊（Het verloren schaap）」「失われた銀貨（De verloren penning）」「失われた息子（De verloren zoon）」の三つの譬えが連続して置かれています。とりわけ同章 24 節および 32 節では、息子について「死んでいたが再び生きた」「失われていたが見いだされた」と表現され、verloren が喪失から回復へという救済の文脈に置かれています。

トーゴ外相の話

ベルギーのありふれた日常 25
ベルギー文庫
藤野 ユミリ

のっけから質問です。
みなさんは西アフリカのトーゴ共和国の現外務大臣が何という名前の方かご存知でしょうか。

結構マニアックな質問かとも思いますが、私はベルギー周辺に暮らす日本人で、この質問に答えられる人を少なくとも 12 人知ってます。
その 12 人とは「日本人学校補習校学習会」（以下学習会）のメンバーの高校生および大学生たちで、なぜ彼らが知ってるかというと、9 月のある授業で読解テキストとして使われた新聞記事にその名があったからです。



グリーンランドにご注目

その記事とは「メルカトル図法の世界地図はやめて　国連決議が採択」（朝日新聞その他）。記憶に新しいかとも思いますが、現在広く普及している「メルカトル図法」による世界地図は、航海用には有効だったろうが、南北の極に近づくほど実際の面積より拡大されてしまうという欠点があり、結果、アフリカ大陸がグリーンランドとほぼ同じ大きさに描かれてしまっている、実際は 14 倍も大きいというのに。そんな地図に慣れてしまうとアフリカ全般の矮小化に繋がりかねないと、かねてより嘆いていたアフリカ諸国が立ち上がり、より正確な大きさで示される「イコールアース図法」による世界地図の採用を促す運動を地道に展開してきた、そして今回、9 月初旬の国連総会にこの決議案が投票にかけられ、賛成大多数でめでたく採択されました、というもの。そしてこの運動を主導的に引っ張ってきたのが冒頭のトーゴ共和国で、代表として総会に参加していた当国のデュセ外相は「アフリカと世界にとって歴史的採択！」「より忠実な描き方により、アフリカの本当の豊かさと可能性を正しく伝えられる」と喜びの声を記者団に語った……というわけで、正解は「デュセさん」。

じつは私その学習会のセンセイをしておりまして、9 月の授業にこの話題を選んで新聞記事をテキストとして配った張本人であります。
この学習会というのはどういうところかというと、日本人学校補習校の中学を終えた卒業生が、この先日本の大学に行っても通用するよう日本語の学びを続けたい、あるいは補習校で培った日本語力をさらに向上させたい、といった気骨のある若者たちからなるいわゆる高校国語のクラスです。運営に尽力されているのは生徒の親御さんたちで、歴代の教育熱心なお母さんたち時々お父さんたちが、知恵と工夫を重ね、粘り腰を駆使してかれこれ 10 数年の存続が実現しているわけです。この学習会の目指すところは、高校の教科書レベルの小説や論説文の読解、小学校 6 年までの漢字の読み書きの徹底、社会的時事問題をからめた小論文を書く、といった決して低くないハードル。
生徒たちは日本語を難なく操り会話も達者ですが、月金で現地校に通って別の言葉で生活している彼らにとって、土曜午前の学習会通いはかなり根性を要するものだろうにと、私はいつも感心しています。時にはご愛嬌の珍問答も出てきたりして、たとえば、日米問題とは「昨今の日本のお米不足の問題」だったり、過去のベルギー国王 Leopold II を「レオポルド 2 号」と呼んだり、「ウクライナはロシアを退治できるか」のような鬼ヶ島に行く桃太郎のような言い方をすることがあったりして、それらを真顔で語る若者たちがセンセイにはとても愛しいのです。笑いを噛み殺しながら。
で、この「メルカトル図法」記事をクラスで読んだわけですが、たとえば「トーゴのデュセ外相」の「外相」の読みに今ひとつ自信がない。次いでセン

セは「外相って何（誰）ですか？」と聞くわけです。互いに顔を見合わせたりうつむいたりしながら、答えはしーん。外務大臣のことですよ、って言ってもしーん。つい diplomacy とか禁じ手の翻訳語を使っちゃって教師としての無策も吐露してしまうのだが、子供たちは「あ～そうか」となって、ようやく「外相」にピンときたところで、ところで日本の外務大臣は誰ですか？と聞くと、「タカイチ！」……「いやそれ首相だし」しーん。じゃあベルギーの外務大臣は？しーん。フランスは？イギリスは？と彼らに縁のある国を一通り当たってみたが、しーんしーんが続き、それじゃああなたたちが知ってる外務大臣の名前は誰よ、となって、晴れてめでたくトーゴのデュセ外相の名が確かな認識となって生徒全員の口からアウトプットされるに至ったのでした。日本語学習会ばんざーい。



メルカトル像
（ブリュッセルのプチサブロン）

さて、話題のメルカトル図法ですが、考案者はゲラルドゥス・メルカトル（1512－1594）という、アントウェルペンの南にあるルッペルモンデという町に生まれた、今で言うならベルギー人です。

彼が生まれ活躍した頃のヨーロッパは、コロンブスやマゼランが新たな世界を発見し、コペルニクスが地動説をぶちかまし、科学が大きな変革を迎えた大航海時代華やかなりし頃で、だから航行路を直線として表す新しい投影法に基づく彼の世界地図は、時代の要請にかなった最先端を行くものとしておおいに評価されました。

同時に、科学が宗教を脅かしカトリックかプロテスタントかの緊張が高まっていた時期でもあり、彼の人文主義的思想が当時ネーデルラント一帯を支配していたスペインのカトリック当局によって異端とされ、牢獄に入れられたこともありました。その牢獄跡は彼の生まれ故郷ルッペルモンデに行けば今でも見ることができます。しかし、メルカトルの業績を知るためには牢獄よりも、シント・ニクラース（ヘントとアントウェルペンの間あたり）にある通称メルカトル博物館（MAP Mercator）を訪れるにかぎります。

シント・ニクラースとは 12 月初旬に向けてチョコレートやスペキュロースなどそれ一色になる「聖ニコラ」のことで、この町の目玉のお祭りですが、もう一つ他の目玉として、ここは「ワースラント王立考古学協会」の本拠地で、ベルギーでも最も古い郷土史研究団体の一つであり、国内随一のメルカトル関連コレクションを誇る、メルカトル博物館の礎を築いた団体でもあります。

この博物館にはかなりコアな地図に関するコレクションがあるのですが、圧巻はやはりメルカトル制の地球儀と天球儀。神学、歴史、哲学、数学、地磁気学などに学者並みに精通する彼のおもしろいところは、自ら旅に出かけることはほとんどなく、地理に関する知識はひたすら膨大な専門書や各地の童話や民話などの読書と地図の蔵書のほか、学者、政治家、旅人、船乗り、商人などとの手紙のやり取りから得ていたということ。そして、デッサンや銅版画の腕は熟練の域にあり、カリグラフィにも凝ったりするセンスと器用な手先、それら全てが当館所蔵の彼の地図や地球儀、天球儀などの作品に見て取ることができます。

さらにここには「世界一大きい Atlas」と称して、鉄製の取手に手をかけて力いっぱい丁寧にめくる仕組みの、遊び心満載の巨大な地図帳があるのですが、その中に私はついに決定的な一枚を見つけました。古典的なメルカトル図法による地図（写真グリーン部分）の上に実際の大きさ（パープル部分）の各大陸をのせて、比較しているアトラスを。グリーンランド、ちっちゃ！

ぜひトーゴのデュセ外相にもシント・ニコラースを訪れて見ていただきたい、メルカトル博物館の誠心誠意を！



世界一大きな ATLAS と一緒に行ったジュリさん
（シント・ニコラースのメルカトル博物館）

告知板

このページは、会員の皆様の情報交換の場です。
- 各種同好会の案内、募集
- 同窓会の案内通知
- 各種イベントの案内
- 求人／求職
- 譲ります／譲られたいなど、どしどしお寄せ下さい。

200 字以内にまとめて下記宛送付下さい。
e-mail:　jimukyoku@nihonjinkai.be
＊紙面の都合上、編集することもありますので、ご了承ください。

日本人会関係行事予定

日程	内容	場所
	2026 年	
7 月　5 日（日）	2026 年度 第 4 回日本人会ゴルフコンペ	Golf de Louvain-la-Neuve
9 月　3 日（木）	2026 年度第 1 回 役員連絡会	ベネルックス住友商事 会議室
9 月　8 日（火）	2026 年度第 1 回 理事会	ブラッセル日本人学校 多目的室
9 月 27 日（日）	2026 年度 大使杯 / 第 5 回日本人会ゴルフコンペ	未定
10 月 17 日（土）	シャンティイ城・コンデ美術館 芸術と歴史探訪ツアー	シャンティイ城
10 月 25 日（日）	初心者向けゴルフレッスン会	Golf & Hotel de Pierpont
10 月 25 日（日）	Westmalle ビール・バスツアー	Café Trappisten Westmalle
11 月　5 日（木）	2026 年度第 2 回 役員連絡会	ベネルックス住友商事 会議室
11 月　8 日（日）	日本人会テニス秋練習会	Wimbledon Tennis Club
11 月 10 日（火）	2026 年度第 2 回 理事会	ブラッセル日本人学校 多目的室
11 月 22 日（日）	SEINO シェフによるベルギー料理教室	SEINO
12 月　5 日（土）	第 33 回日本語スピーチコンテスト	ブラッセル日本人学校 体育館
	2027 年	
1 月 14 日（木）	2026 年度第 3 回 役員連絡会	ベネルックス住友商事 会議室
1 月 19 日（火）	2026 年度第 3 回 理事会	ブラッセル日本人学校 多目的室
3 月　4 日（木）	2026 年度第 4 回 役員連絡会	ベネルックス住友商事 会議室
3 月　9 日（火）	2026 年度第 4 回 理事会	ブラッセル日本人学校 多目的室
5 月 13 日（木）	2026 年度第 5 回 役員連絡会	ベネルックス住友商事 会議室
5 月 18 日（火）	2026 年度第 5 回 理事会	ブラッセル日本人学校 多目的室
6 月 10 日（木）	2026 年度第 6 回 役員連絡会	ベネルックス住友商事 会議室
6 月 18 日（金）	2026 年度第 6 回 理事会・正会員総会	未定

●学習院の卒業生、及びゆかりのある皆様へのご連絡

学習院の卒業生、及びゆかりのある皆様へのご連絡
コロナ禍来、活動が休止しておりましたベルックス桜友会の活動を再開致したく、ベルギー、及びルクセンブルグ在住の学習院卒、及び、関係者の皆様でお力添え頂けます方、是非下記メールアドレスにご連絡をお願い致します。
小出敦　atsushikoide0221@gmail.com

●日本語カトリック教会からのお知らせ

ミサに関して
11 月 8 日 (日) 第 2 日曜日　11:30~12:30
12 月 13 日 (日) 第 2 日曜日　11:30~12:30
場所 : ブリュッセルのスクート会聖堂
(Mission de Scheut)
住所 : Chaussée de Ninove 548,
1070 Bruxelles

聖書勉強会
11 月と 12 月は未定ですので、下記にてご確認下さい。

上記内容は、時に変更される時がありますので、予め下記にてご確認下さい。
☆ https://www.facebook.com/groups/592349231569301/
☆ nihongomisa@gmail.com
☆ 長南恵子 : 0486-775750



UIJIN BEER 初陣
330ml, Alc 6.0%
ベルギー産酵母と手間をかけたホッピング手法により華やかでフルーティーな印象を持つビールです。大麦麦芽と小麦麦芽の絶妙なブレンドにより醸し出されたフレッシュかつ奥深い味わいをお楽しみください



UIJIN YUZU BLOND 初陣柚子ブロンド
330ml, Alc 6.5%
初陣同様にベルギー産酵母を使い、丁寧なホッピング手法で醸造された大麦麦芽100%のブロンドビールです。ホップと同時に高知県産柚子の皮の部分だけをビールに漬け込み、爽やかな苦味を引き出しています。

お買い求めは下記食品販売店でお願いします
田川（ブルガット、ストッケル、デルタ）
Asia Supermaekrt (Rixensart) FRESHMED (Etterbeek)

商品のお問い合わせ先；info@riobrewing.jp
レストラン、量販店様のご注文は
Foodex Belgium SPRL 電話 02 721 14 21 まで

【会報アンケートのお願い】
より良い会報づくりのため、読者アンケートを実施中です。
QR コードまたは以下のリンクから、簡単にご回答いただけます。
読者アンケート：https://forms.cloud.microsoft/e/XV6KJhDu3v
所要時間は約 3 分。皆さまのご意見をお待ちしております！
ご協力おねがいいたします！



編集後記

日の出も日に日に遅くなり、朝の空気に冷たさを感じる季節となりました。秋の深まりを感じられる今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今年の５月にチェコからベルギーに異動となり、気づけば早半年が過ぎようとしております。初めてチェコに赴任したときに比べると、生活基盤を比較的整えやすいベルギーでの暮らしには早くも慣れ、ブリュッセルの色々なお店や施設、そして頻繁に開催されるイベントに目移りしながら、新しい発見を楽しんでおります。

ベルギーの名物と言えばビールやチョコレートと並んでフリッツ（フライドポテト）が有名ですが、家族揃ってこのフリッツが好きです。チェコのフライドポテトも美味しかったですが、ベルギーの方々と話していると、ベルギーフリッツへの並々ならぬこだわりを感じるときがあります。「この店は牛脂で二度揚げしているから美味しい」、「ベルギーで食べるならマヨネーズか Andalouse ソース。ケチャップじゃない」など、さまざまなうんちくを聞きながらフリッツ専門店の食べ歩きを楽しんでいます。

最近は Ixelles にある Frit Flagey を勧められ、実際に食べてみたところ家族にも好評で既に何度か足を運びました。表面がカリっと香ばしく揚がっているタイプのフリッツが好みの人にはぜひ一度試していただきたいお店です。

こうしたフリッツを含む屋台文化（フリットコット文化）がベルギー各地域の無形文化遺産として認められています。単なる食べ物としてだけではなく、この地域の日常に根差した文化の一部だとみるとフリッツもまた少し違って見えてきます。ジャガイモの選び方やカット、揚げ油、二度揚げといった調理方法から、フリットコットに立ち寄り、家族や友人と楽しむ習慣までを含めた文化全体が評価されているとのことです。

フリッツの発祥には諸説ありますが、ベルギーではもともとムーズ川沿いで小魚を揚げて食べる習慣があり、冬に川が凍って魚が獲れなくなった際、その代わりにジャガイモを細く切って揚げたのが始まりという説も伝えられています。史実としては議論もあるようですが、庶民の日常から生まれ、街角で手軽に食べられるように発展した福岡の屋台や日本各地にある立ち食い蕎麦などに少し通じるところがあるのかもしれません。

冬の足音も近づいてきました。これからの肌寒い季節、街角で熱々のフリッツを頬張りながら、ベルギーならではの季節の移ろいを楽しんでみるのもよいのではないでしょうか。

（月担：近藤）

広告を募集しております。

掲載ご希望の方は前もって、日本人会事務局へご連絡の上、以下の枠内に編集したＰＤＦファイル（カラー、リンク可）を日本人会事務局（jimukyoku@nihonjinkai.be）へご送付下さい。

Size	Member Price	Non-Member Price
1/4 Page（縦 60 × 横 198 mm）	60 €	170 €
Full Page (A4)（縦 297 x 横 210 mm）	200 €	450 €

原稿締切は原則会報発行月の前月１日です。詳細は日本人会事務局までお問い合わせ下さい。掲載広告については、当会が内容を保証するものではありません。情報の詳細等は、各掲載主へ直接お問い合わせください。掲載広告のご利用における . 事故・トラブルに関して、弊会では一切の責任を負いかねます。

広報委員会

会員限定コンテンツ

※ベルギー日本人会にご入会いただければ、会員限定コンテンツもご覧いただけます。

入会のご案内

当会に入会ご希望の場合は、その旨、メールにてご連絡ください。
jimukyoku@nihonjinkai.be
折り返し入会手続きと入会申込書をお送り致します。理事会での審査・承認のため、お申し込みいただいてから、1 ～ 2 週間程要しますので予めご了承ください。

＜会員の種類＞　（ベルギー日本人会規約　第 5 条）
1. 正会員：ベルギー所在の日系企業及び団体、日本法人の支店、事務所及び子会社、及びそれらに準ずると認められる企業・団体。
・日本人会の商工委員会に所属し、日本人会の行事に参加頂けます。また、総会での議決権を有します。会報（隔月発行）をお届けします。

2. 賛助会員：本会の目的を支持し、恩恵を受けることを望む個人もしくは法人。
・日本人会の行事に参加出来ますが、総会はオブザーバーとなります。
・会報（隔月）発行のお知らせとパスワードをお届けします。

賛助会員は以下となります。
1) 普通会員：正会員に所属するもので正会員により届出られた方。
2) 個人会員：ベルギー在住の個人。
3) 特別会員：正会員以外の法人もしくは個人
4) 名誉会員：在ベルギー日本国大使館、欧州連合日本政府代表部、ブラッセル日本人学校及びその届け出するメンバー、及び理事会により特に名誉会員と認定された方。

ご不明な点がございましたら、事務局までお気軽にお問い合わせください。